

戦後初期の学校図書館の活用における雑誌『図書教育』の役割

The Role of the Journal "TOSHO KYOIKU" for Use of School Library in the Early Post-War Period

学籍番号：201621637

氏名：森澤 ひかる

Hikaru MORISAWA

本研究では、雑誌『図書教育』に掲載された記事等を分析することで、本誌が第二次世界大戦後初期の学校教育における学校図書館の活用を果たした役割を明らかにすることを目的とした。

文献調査の結果、戦後の新教育において学校図書館の必要性が認識され、『学校図書館の手引』の発行等を機に全国的に学校図書館運動が広がっていったことが明らかになった。こうした時代背景の中で、教育の研究・調査を目的とした機関である国立教育研究所の下に図書教育研究協議会が生まれた。図書教育研究協議会の準機関誌として『図書教育』が発行され、編集部として図書教育研究会が組織される。

文献調査の結果の分析から、『図書教育』の特徴として次の3点が明らかになった。(1)『図書教育』の編著者として、戦後の教育学の基礎を築いた人物が関わっていた。そうした人々が戦後初期の学校図書館界を牽引し、本誌において学校図書館の活用に関する研究発表の場を設けたことが戦後日本の学校図書館の研究発展に寄与したと考えられる。(2)全国学校図書館協議会の結成に『図書教育』および図書教育研究協議会が貢献した。『図書教育』は、日本各地での学校図書館研究組織の結成についていち早く報じ、継続的に関連記事を掲載することで、それを読む学校図書館関係者たちを啓蒙し活動意欲を向上させた。また、図書教育研究協議会は東京都学校図書館協議会をはじめとした全国学校図書館協議会結成の動きと連携し、その推進に貢献したと考えられる。(3)『図書教育』は、学校図書館の活用の方法等について網羅した議論を交わす場として機能し、後の学校図書館法整備に繋がる研究や活発な議論が連綿となされていた。特に学校教員や研究者の研究発表の場としての役割を果たした点は学校図書館運動にとって重要であったと考えられる。

したがって、『図書教育』が戦後初期の学校教育において学校図書館の活用を果たした役割は、学校図書館運動の黎明期を牽引し、学校図書館法整備や全国学校図書館協議会の設立等の現代へ繋がる制度、組織の結実へたすきをつなぎ、学校図書館の活用の基礎を築いたことだと考えられる。

研究指導教員：平久江 祐司

副研究指導教員：呑海 沙織